
紫陽花

たけ10005

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫陽花

【Nコード】

N1240F

【作者名】

たけ10005

【あらすじ】

精神病による性的虐待売春婦の話です。実話ではありません。私は男なので、推測です。エロシーンはほぼ皆無だから、15禁。

ヤミちゃん（前書き）

うつ病や、統合失調症は知ってると思います。最近、境界性パーソナリティ障害（BPD：ボーダーライン）が流行ってるそうで、本が不謹慎にも興味深く、書きました。見聞を広げてくださると嬉しいです

ヤミちゃん

心が 壊れそう

（ね…壊しちゃわない？）

誰？

（私はあなたの心の闇。ヤミちゃんとも呼んで。名前なんて無いからね）

ヤミちゃん？どうしてそんな酷いこと言うの？めそめそしてる私に嫌気がさした？私の心だから、今雨にうたれてるの？

（そう。アジサイみたいな気持ちよ。雨の季節に咲き《生き》雨にうたれるたび、頭を垂れて地面を舐め。頭を上げられたら、また雨にうたれる。私は、いわば紫陽花の妖精。梅雨時だけ存在する闇）
ごめん…

（死んだら良いわ。私は幸せを望む）

でも、私が死んだら、多分ヤミちゃんは死ぬわ。

（わからない？あなたが死ぬから、私が死ぬから、永遠に苦痛から解放される。これほど幸せなことがあつて？）

死ぬのは良い…でも、プライドはあるの

（プライド？何一つできなくて、幻覚に心狂わされてるあなたにプライドなんてあるの？）

私は、見てしまったの。人が殺される所を。醜かったわ。「ひい！殺さないでくれ！」って命ごいして死んだわ。犯人は通り魔ではなく、多分怨恨。刺し殺す時、犯人は笑ってた。そして、私を見て逃げ出したから。

つまり、生きるとは醜いことよ。

（そうかもしれない。でも、これからする話を聴いても、あなたはプライドを保てるかしら？）

聴かなきゃいけないの？別にいいけど。私はプライドだけは人一倍ある。誇り高い人間なのよ。さあ、話して。

（《ふふっ乗ったわね》いいわ、話して差し上げるわ。あなたは、人格障害。今は差別的だからパーソナリティ障害っていうけど、負け犬のあなたには、人格障害の方がお似合いよ。最近増えて、社会問題になりつつある。なってるかも）

何？それ…？

（正確には、DSM・TRによる分類では、B群の境界性パーソナリティ障害。周囲に依存し、周囲が支えきれなくなると、激しい反応を起こす。病状について、さらに詳しく知りたいなら、外伝に書くわ）

誰に話してるの？

（あなたと、読者様）

幻覚、精神病なんだ…

（わかってたハズよ、あなたは、見て見ぬふりをしただけ。リストカットって、加減すると楽しいわよ）

わかった。してみる。死なないなら、いいや

（動脈をザクザク切ったらダメよ）

うん、

ザク…

血が…

（血がどうしたの？）

ふふっ憎らしい私の体に傷ができた。イライラもすっきり…気持ち良い…

（雨…また降ってきた…効き目薄いのかな？）

もっと…幸せになりたい…

（…いいこと思いついた）

売春（前書き）

心の闇（本人いわく）であり、紫陽花の妖精のような、心の梅雨時に現れるヤミちゃん”私”にあなたはパーソナリティ障害だと告げ、リストカットを薦める。まだ満たされないヤミちゃんは、良いアイデアがあると言って…

売春

（男に体売ってみない？）

…えっ！？でも、まだ20歳になっても処女だし、彼氏作って身も心も捧げたい。。。

（幸せになりたいって言ったじゃない。）

だから、彼氏…

（人の話聞いてた？あんたは精神病。考え方が偏って白か黒しかなくて、少しでも思い通りにならなかったら罵倒する、キレる。見た目まあまあだから、売春婦なら売れるわよ）

そうかな？売れるか…って！まだやるとは…でも、私に彼氏はできない…当たり前だよ、友達はいない。仲間に入ってもすぐ追い出される、世界のやつかいもの。

（だから、お金貯めて遊ばーよ！心の雨止むよ）

そっか…そうだよ…自分をめちやくちやに壊す。

もう二度と心が再生しないように…みんな、どんな顔するかな？楽しみだ…

（《そう、そうして私が心に乗っ取る》ネットで店探そ）

うん、ヤミちゃんありがとう。助かったよ。

（《ありがとうって…私は…》うん、どういたしまして。ここ、あなたの雰囲気合うわ。清纯派の店）

うん、電話する

…明日から来てくれって。これで、救われるんだね…

「ご指名ありがとうございます、美咲です」

美沙は、呼ばれてもわかりやすいように名前に近いニックネームを付けた。

「やあ、なかなかの美人だな…」

シーンはできるだけ避けさせていただきます

「痛っ…」

リストカットでは感じられない痛み…心を蝕んでいく…

「美咲ちゃん、本当に処女なんだね…おじさん嬉しいよ。運が良かった。生きてた甲斐があつたよ」

生きてた、甲斐…

「ん…」

初めてのキスはタバコくさかった。まだ吸ったことないけど、さっきまでこの男が吸ってたからわかる。

愛する人と交わすハズだったこと…みんな、たかが2万程度のために捧げた。

いや、違う。これは病気の結果。いつかは来るとか、思ってもみなかったけど、涙は不思議と出なかった。

生きる。…はっ！笑える。私の生きるって何？

（死ぬことだよ）

ヤミちゃん…

（雨、さっきやんだよ。そっちも病んだみたいだね。おめでとう。初めての感覚はどう？）

笑いが止まらないよ。シアワセだよ。とても。

（痛い？）

痛くない。みんな、これで泣くんだよね？なんでだろ？

（もう戻れないよ。）

わかってる。だって痛くないもん。愉快だよ、私の傷つく様は

（私も。太陽が見える。しかし暑いね）

夏だからね

（梅雨明けたからね。これからどうする？）
知れたこと…

（私は逝くよ。紫陽花は梅雨の花だから）

そっか…でも、病気は治らない

（うん。後継者は決まったよ。自己嫌悪という名の罪悪感。）
わかった。お休み、ヤミちゃん

(また梅雨に会おう)

売春（後書き）

少し悲惨過ぎるでしょうか？かなり差別的なことだから、扱いには気をつかったのですが、数日置いて読むと吐きそうになる。小説家になろうのメンバーなら、コメントを送れるので、誹謗中傷は感想欄には書かないでください。偶然同じ環境の人が読んだら傷つきます。感想欄に書かれたら、容赦なく消させていただきます。

ちなみに私は、元精神病院（一番重傷な病棟）の看護助手で、数十人の様々な精神病患者様と触れ合いました。泣く人、自分の置かれてる状況の理解ができない人、食べ物や口の周りにくっつけて歩く人など。

この主人公は、決してマレではありません。しかし、売春婦が全員精神病患者ではありません。

もし、精神病患者と知り合ったら、そつと手を差し伸べてあげてください。同情はしないでください。辛がる人もいます。転んだら体を起こしてあげて、道に迷ったら正解の道を教えてあげてください。心から、お願い申し上げます

入院と救い（前書き）

今回は、実際にあった出来事を多数含め、語り口調で書きます。
病氣の人が病院に行きたくなるように書きました。

入院と救い

あれから一年…

美沙は自己嫌悪に陥っていた。

寝込むようになると、心の闇（本人いわく）ヤミちゃんが復活。リストカットや売春を薦める。心の雨が降る。

私には何もできない…当たり前だよ、友達はいない。仲間に入ってもすぐ追い出される、世界のやっかいもの。そう考えると、幻覚や幻聴が増える。

美沙は、半狂乱になって医療保護入院。

最初は大暴れ！棚の中や机の上を散らかして投げつける。

しかし、そういう時は抗精神病薬の定番！

自傷行為も無くなる。

医師は言います。

境界性パーソナリティー障害は、些細なことで「見捨てられた」と感じます。信頼すると言いつつも、相手から「裏切られた」と思うので、すぐさま「攻撃」してしまいます。と。

薬が離せなくなつた変わりに自傷行為は全くやらなくなり、ただ過去を悔やむだけ。

見捨てられ不安がある。だから両親に依存している。怖い親に顔は見せられないが、先生と一緒に話そのものの訓練をして親に隠し事する代わりに対話する約束した。これも生活、闘病訓練

でも、病院に入院して良かった。

同じ病気の人”境界性パーソナリティー障害は半分いる”病棟だった。

これはあまり珍しいことではない。

人口のなかで、境界性パーソナリティー障害の割合は0・7～2・0%

精神科に通院してる人のうち、境界性パーソナリティー障害の割合は11～34%

精神科に入院している人のうち、境界性パーソナリティー障害の割合20～60%

けてまればない。

入院患者の中には、リストカットがカッコイって思う人や、すぐキレル人、パパさんママさんなのに自己嫌悪な人、かまって欲しくて仕方ない人。

しかし、美沙は性的自虐行為したとは言えない。

それが回復を妨げました。一ヶ月が過ぎ、二ヶ月が過ぎ…ほとんどの入院患者さんは、三ヶ月で退院。美沙は追い詰められました。医師は、「会話のキャッチボールしようか？」と提案しました。

美沙は、ただ医師の言うことを聞き、嫌われないようにしようと心に決めました。だから、断れるはずはありません。

「はい……ごめんなさい」

「なんで謝るの？」

「私は鬼っ子だから。人に迷惑しかかけられないから」

「そうですか…こうしましょう。美沙さんが苦しいこと、何らかの自傷行為。色々文字にして吐き出してください。会話のキャッチボールも、ルールを決めましょう。話をして、お互い受け取りやすい方法で。例えば、反対方向に投げて、取って来いと言われても、私は取りません。でも、私の方に投げたらしっかり受け取ります。しかし、私も失敗するかもしれない。それでヤケになったら、私は中断します。リハビリテーションですね。リカバリーの施設も紹介します。ぼちぼちリハビリ始めましょう。薬も減らしていきますからね。あなたは良くなってきました。根気よく生きましょう」

美沙は、しょんぼりしながら聴いていたら、いきなりリハビリと聞いて驚きました。

「あ……あれ？私良くなっているのですか？」

「はい、がんばりましたね。自傷行為無くなりました。これからその調子で。あと一、二ヶ月で退院できるかもしれません」

美沙は、ぱあっと明るくなって、キョトンとしました。

「リカバリーって何ですか？」

「リカバリーとは、重い精神障害における回復です。リカバリーを起こす原則は四つです。

ピアサポート

自己決定

自己責任

ものの見方が変わる、です

自分は『ただの人』であると思い出し、『ただの人である』ことの価値を思い出すことです。

同じような境遇、病気で回復した人にサポートしてもらいます。

マーク・レーガンさんが著書『リカバリーへの道』でこう語りました。

『統合失調症などの重い精神の病を持っても、人は立ち直ることができるのです。人として尊重され、希望を取り戻し、社会に生活し、自分の目標に向かって挑戦しながら、かけがえのない人生を歩むこと。それがリカバリーです』と。ゆっくり始めましょう」

「ただの、人……」

美沙は、その言葉をかみしめました。頬を、透明な液体が流れます。

「あ……あれ？私……」

医師は、にっこり微笑みました。

翌日、美沙はすべてを紙に書きました。親に見放されたこと。学校でいじめられたこと。そして……体を売ったこと。

美沙は泣きながら、精神病患者によくある文字の乱れをできるだけ

なくして書きました。

医師は、「これから幸せな毎日が送れるから」と、微笑みました。
美沙は大号泣しましたが、不思議とすがしくなって、涙を指で拭って微笑みました。

入院と救い（後書き）

紫陽花を書いた時は、回復方法がわからなかったのですが、救う方法が見つかって続きをハッピーエンドで書けました。

最初から思いついてれば、と思いました。

不快な気持ちで終わっただけの方はすみませんでした。色々勉強になりました！

4話 居場所（前書き）

今まで読んでない方、忘れた方用の解説を書きます。

心の闇、ヤミちゃんに言われるまま性的自虐行為をし、結局発狂して入院した美沙。ボーダーライン……境界性パーソナリティ障害と診断され、退院した。今回はその後のお話。

4話 居場所

美沙は退院し、みどりの里という地域支援センターに通い始める……そこは、最近出来た施設らしい。何か変わった施設なわけではない。みんなで集まってリクリエーションをする場でもある。参加者のストレス解消の簡易カラオケや、将棋やオセロが揃っている。

ここにはなんと、お風呂まである。入浴料は百円、冷凍食品も半額ほど。参加費は百円。他、お弁当四百円でリクリエーションに参加費が数百円。

全て精神病患者であることを市に申請し、参加希望を出すと簡単な審査で格安のサービスが受けられる。

精神病患者は就職がまだまだ厳しい。だから、バイトもできない人が生活保護や家族に扶養され、障害者年金（年金を今まで払ったか、払う前に病気になった人がもらえる）で暮らす精神病患者の社会復帰の早期化を狙っている。

もつとも、みどりの里は入所後就職しても休みの日に遊びに来る人こともできる。

ヤミちゃんは、時々現れては消える。満ちては引く、さざ波のように……

「おはようございます！」

みどりの里には一か月半いる。

美沙は、そこに居場所を見つける。かつての暗い顔は、みどりの里の中では見せない。

そうしなければならなかった。

昔は、毎日親子喧嘩で鬼っ子だから。はじかれたと思っていた。だから、ここだけは。ここだけは、守り抜く。居場所を守る。

精神病患者の施設は、生活支援センターのように日常訓練という、例えば料理や軽作業を行ったり、就労移行支援事業という、就職や一人暮らしする為のショートステイなど、社会に自立を目指す障害者がいる。

輝く陽の光が差す大ホールで、皆で雑談してる。

「美沙さんはどんな職場に就きたいですか？」

就職の話の流れで話をふられた。

「すみません、何かの役にたてれば、それほど嬉しいことは無いのですが……」

美沙は萎縮してしまう。

「なら、ヘルパーの資格を取って看護助手の仕事をするの良いですよ 資格無くても、給料が少なめになるだけで、バイトなどオツケーらしいですよ！ ヘルパーは、患者さんをベッドから車椅子に乗せる仕事やシーツ交換の素早さテストがあるらしいですよ」

別の女性参加者が両指を合わせて笑って言った。

美沙は、戸惑った。

「で、でも私はドジだから、人様のお世話をさせていただくなんて……」

「美沙さんは、私たちのムードメーカーなんですよ！」

さらに他の参加者が言う。たしか、最近通い始めた、美沙の二週間遅れで来た男性だった。

「えっと……確か……」

美沙は記憶をたどるが名前が出ない。

「渡部です！ 渡部圭一」

「そう！ その渡部さん」

「どこですか……」

圭一は呆れてるやら、微笑んでるやらの顔でつつこんだ。続いて言う。

「僕は統合失調症です。しかし、原因不明の病気に八つ当たりもな

にもできません。悔いる前にもう一度歩きたいのです。美沙さん、貴方ならそれができる気がするのです」

美沙は思わずたじろいだ。

優しい人。第一印象には、一か月ばかり遅いけどね……。白か黒かの境界性人格障害の特徴の中の美沙の価値観では、彼は無だった。本人がパーソナリティー障害を人格障害と言うあたり、完治には程遠い。

「悔いる時間も必要だわ」

美沙の思考を遮ったのはお局様。

圭一は笑顔から一転、落ち込んでしまった。

精神障害者だからコミュニケーションが下手だというわけではないが、気分症の人や、ふさぎ込んでばかりいて、ついコミュニケーションをとらなかつた為に失敗する人達もいなくはない。

「私は……」

美沙が間に入る。発言力は無いが、薬を飲んでから明るくなった力を信じてお局様に対抗する。

「私は、進みたいです！ 今まで、本当に色々ありましたけど、再スタート、してみたいです！」

圭一は、天使様を拝むように美沙を仰ぎ見る。美沙には、若干の力リスマ性があったのだが、病気で埋もれてきた。

しかし、病気も投薬療法、心理療法、生活技能訓練によって陰性症状（幻覚、ヤミちゃんなど見えない症状）はほぼ消滅し、陽性症状も改善されつつある。

「ふんっ！ せいぜい いきがって足元救われないことね！」

まだソリが合わない人もいるけど…私は、元気です！

5話 恋愛（前書き）

美沙はみどりの里という施設に通い始める。

そこで、仲間が出来て居場所を見つける。

統合失調症の渡部圭一という人と出会った。

そして、美沙は言い切る。「私は、進みたいです！ 今まで、本当に色々ありましたけど、再スタート、してみたいです！」

5話 恋愛

「こんにちは！」

美沙は、今日は みどりの里の送迎に少し遅刻して、電車と徒歩で みどりの里に着いた。

「良かった！ 今日は来ないと思ってました」

圭一は片手を上げて挨拶する。

無だった人が有になる。それが人との絆。美沙はその喜びに浸り、はにかんだ。

圭一は、それを見てうつむく。

美沙は小首をかしげ、少し悲しくなる。

あれ……なんでこんなに悲しいのかな？

美沙は主治医の言葉を思い出した。

『貴方は、統合失調質パーソナリティー障害です。故に、人や物に依存して、裏切られると激しい反応をします。依存対象は多くすることです。依存拒絶反応も少なくなるでしょう』

私は、この施設がすべてだ。それは依存し過ぎだろうか？でも、スツッフには相談しにくい。主治医には、それなりに依存していると思う。

何か。何か他に依存対象を探さねば！

「良かったです。美沙さんがいないとイマイチ盛り上がらなくて。」
他のメンバーも、私に依存している。でも、”みどりの里に”じゃない。”美沙に”だ。私も誰か個人に依存すれば……

夕方になり、みどりの里は解散する。

帰り道、圭一に声をかけられ、一緒に帰ることにした。駅までだけだ。

「じゃ、帰り道逆なので」

圭一に声をかけられ、美沙は勇気を振り絞る。夕日に彩られた街を

ぐるりと回って見、うつむく。そして……。

「あ、あの……私と付き合ってくださいっ！」

実は、美沙は告白は初めてだった。おずおずと圭一を見ると、

「はいっ！喜んで」

圭一は、満面の笑顔で言った。

家に帰ると、母がキョトンとして、微笑んだ。

父は、背を向け新聞を読む。

父と母は、男と付き合ってるのか？そんなこと考えもしなかったのは事実だ。当然のような女の幸せを、妄想することすらない。

圭一とメアドと電話番号を交換して、いくつもの愛を呟き、数え切れないほど愛を交わした。

そのたびに、美沙は自分は汚い女だと思った。

ほんのわずかでも、愛する圭一に黙っていたことがある。そう、男に体を売ったこと。

美沙は、圭一にあらかじめ処女膜は壁について破れないタイプがあると吹き込んだ。事実、張り付いてるタイプはあるが、流血しないかは知らない。

美沙に、20年の人生の重みがずっしりと乗った。

圭一の部屋のベットの上でヒザを抱えて座り込むと、いよいよ自分の元娼婦という愚かさか骨の髄まで痛んで、泣き叫びたかった。

圭一の匂いがする。それがたまらない。

懺悔しなかった。でも、愛する人を傷つけない。娼婦だったことを話すことはできない。

ヤミちゃんの誘惑に負けたなんて、それこそ言い訳だ。

罪、なんだと思う。両親に養育されていたから、無理して嫁がなくても良かった。

道楽もなかった。貯まった貯金は汚れたお金だけど、それは十字架のように大事にすることはない。買い食いや人並みにファッション

に憧れて本を買った。
でも、服は買わなかった。いまさら、色気づいても美しさとは遠く離れてる。

だから圭一と一緒に居ると嬉しい反面、申し訳なく思う。

一度、圭一と二人で教会見学した。

精神病になると、何かに頼りたくなる。神は意識しているが、クリスチャンではない。

翌日、教会に向かった。

二人とも病気の前後の懺悔だ。圭一には、中を見たいと言っただけで、二つ返事で了解を取った。

事実、幼少時実家の近くにある教会がすごく気になった。ただの好奇心だが、今叶った。

教会の中は広く、無機質で真新しい。

二階に神殿らしき部屋があった。

「圭ちゃん、お布施とかいらないのかな？」

そう話してる間にも、神父様は来ない。

「いいんだよ。祈る」

内心、ホッとした。いったいどう言っただけ懺悔を拒否するフリをするのかは、まったく考えてなかった。思いつかなかった。

きつと圭一も祈りや懺悔をしたかったのだろう。

聞くのは野暮だが、人の過去、プライベートのことを考えたことが、自分にあるだろうか？

そう思ったら、さつさと次の予定、ホテルのモーテルに入った。

迂闊、だった。

しかし、鈍い男と付き合うなら、それが一番だとさえ思える。

美沙は自分が汚い女だと思ひ知るたびに、圭一は美沙の肩を抱きしめて腕まくらした。圭一は

「しびれて痛い時間が愛する人を感じる時間で嬉しい」
と言った。

圭一も初めてじゃないな……と考えると嫉妬心が溢れて来る。
以前、圭一に

「私のどこが好き？」

と聞いたことがある。

圭一は、ちよつと迷つて

「顔……」

と言った。私は

「なあんだ……」

つて、思わず言ってしまった。

私自身は美人とは思ってないが、周りはけっこう誉めてくれる。イヤミだったらしいと思われただろうか？ と、ギクリとした。

「あと……」

「ん？」

「ムードメーカーな所。才能あると思う」

「そっ……か……」

「不満……か？」

「ん〜ん……嬉しい」

本当に嬉しかった。才能あると良いな……つて、私らしくもなかつた。

ただ……好きな所の上げ方やかわし方は、初めてじゃないと友人に言われた。

……いいか……私もだし。また、明日……

6話 家族（前書き）

美沙と圭一は付き合い始める。

しかし、美沙は昔売春婦だったことを今になって悔やみ、圭一に隠すことで良心の呵責に苦悩する。

6話 家族

ある日、みどりの里で付き合い始めた圭一と話している時、看護助手になりたいと言った。

圭一は一人、美沙の家に行った。

「美沙さんのお父さん、お願いします！ 美沙さんにヘルパー資格を取らせてください！」

圭一は美沙の父に出資を頼む。

「はじめましての直後にそんな話とはな、考えておく」

父は、今日だけは美沙に背を向けないで座った。

そして、おもむろに口を開ける。

「みつちゃん。話がある」

みつちゃん。それは、両親の美沙への愛称だ。中学生のころ、ただ一度だけ反抗して「馴れ馴れしく呼ばないで！ 私はもう、子供じゃない！」と抗議してからというもの、『美沙。』に変わった。

いまさら、そんな呼ばれ方されても知らないんだから。そう思っただ断固とした態度で父と正面から向き合った。

いつからだろう。向き合わなくなったのは。

それも遠い記憶。

「実はなあ…… 今日、美沙の彼氏を名乗る男が来てな……」

夢を両親に知られた。それを知った美沙は、みどりの里に足音高く乗り込む。

「圭一！ 出てきなさい、圭一！」

普段は『圭ちゃん』と呼んでいるが、周りも見ずに開口一番、鬼の形相で大広間に入る美沙。

さすがに皆、いつものように”夫婦喧嘩”などと冷やかさず、ただ

じつと事の顛末を見守る。

「美沙……」

部屋の左奥に圭一が拾ってきた猫みたいに小さくなって名乗り出た。「圭一、よくも父さんに夢の話してくれたわね。戯れ言だって、なんでわからないの？ そりゃ、介護は興味あるけど、私達は介護される側。父さんも、苦虫を噛み潰した顔してたわ」

「しかし……」

「しかしも力カシもない！ って言葉の意味、初めてわかった。さよなら。もう二度と来ないわ。」

美沙は、圭一を拒絶する。

みどりの里の皆とも会えない。しかし、悲しくはなかった。ただ、むなしかった。虚ろ。そう、虚ろ……だ。

美沙は一週間、部屋にこもった。人はいつだって孤独だ。

それを地でいくのが今回、偶然美沙だった。ただ、それだけのこと。しかし、美沙は悲しかった。今回の孤独と相対する言葉に、”人は一人では生きていけない”という言葉もある。

「どっちなよ……」

美沙は、誰に言うわけでもなくそう呟いた。

廊下から、父の足音が聞こえる。

「美沙、話がある。このままでもいい、聞いてくれ。来月ヘルパー資格取得授業があるらしい。行ってみないか？」

父はなんと、話を却下したのではない。承諾したのだ。

「でも、父さん……」

「娘の夢は親の夢だ！ 親が子を第一に考えるのは当たり前だ！」
父は美沙を突き動かす。

美沙は、手を口に当てる。

ただ、それだけを言っただけだった。それだけがすべてだ。かまって欲しかった。殴られてもいい。相手にして欲しかった。振り向いて欲しかった。必要とされたかった。気持ち……聞いてほ

しくて、受け止めて欲しかった。

……叶ってたんだ。ずっと、ずっと叶ってたんだ。涙が止まらない。愛されてる。ならば、私も愛すべき人を愛さねば！

すると自然と心の闇……ヤミちゃんは消えた。

今思えば、”私は鬼っ子”だとか、”あなた達は親なんかじゃない”とか、酷いこと言ってしまった。

若気の至りとか、病気とかは言いたくない。悪いことをしてしまった。

『悔いる前にもう一度歩きたいのです』

圭一のいつか聞いた言葉を思い出す。

今いる所はスタート地点だ。スゴロクの”スタート地点へ戻る”のコマに来てしまっただけ。

これからは、うんと親孝行しよう。

そして、圭一とも仲直りする。

翌日、美沙はみどりの里に来た。

迎えたのは、参加者とスタッフ。そして……

「僕はここにいますよ」

圭一のその一言が、あまりに温かくて、優しくて、柔らかくて包容力があって、美沙の心を溶かした。

そして22歳で結婚。

就職は同じ町の精神病院の看護助手。境界性パーソナリティー障害者だということはオープンにした。

きつとこれからもまた始まる。奇跡のように輝く日々が。

7話 看護助手（前書き）

美沙はヘルパー資格取得を目指す。

それは圭一が美沙の父に支えて欲しいと頼んだからだった。

美沙は両親にかまって欲しかった。それは叶っていた。鬼っ子なんかじゃなかった。

22歳で結婚。

就職は同じ町の精神病院の看護助手。境界性パーソナリティー障害者だということはオープンにした。

7話 看護助手

「渡部さん」

看護師長から声をかけられて振り向く美沙。

そう、美沙は看護助手になって半年。嫁いで一年。

メッセンジャーも患者さんとの会話も、そして共同の家事もそつなくこなした。

メッセンジャーの仕事とは、各部署の連絡係のこと。書類を配達する。

.....

「でもねえ、お母さん」

美沙は初めて休暇をとって実家に帰って仕事の話をした。

「渡部美沙って、なんかイマイチピンとこない呼ばれ方なんだよね。なんで美沙って名前にしたの？」

母は嫁いで名前の変わった美沙に微笑みかける。

「カッコイイじゃない」

「そんだけ？」

「そ、それだけ」

美沙は椅子から伸ばした足をバタつかせて天井を仰ぎ見る。

「あっきた！ 私はキチンとした名前つけるからね。我が子よ」

母は軽く折り曲げた指を口元にあて、笑う。

「.....できたの？」

「うん。本日のもう一つのご報告」

美沙は伸びをした後、お腹に手をやる。

「そっか.....月日が経つのは早いわね.....私もついにおばあちゃんか.....」

母も伸びをする。こんな仕草も似てきたんだな、と美沙は思う。

まだ娘か息子かもわからないけど、私の子も私に似るのかな？と思

うと不思議な感覚がある。

「ただいま」

父が帰って来る。両親には美沙が帰ることを伝えてなかった。サプライズだ。

「美沙！ 帰ってたのか」

「うん。お父さん、ありがとう。ヘルパー資格取って良かった！みんな優しいし」

「そうか、良かったな……」

「知ってる？ 精神病棟は男性看護師さん多いの。なかなか、他の病棟の仕事はさせてもらえないみたい。ナースってイメージがあるからかな？ よく知らないけど。それと、なんと重大発表があります！

」

……

そして、いつもの日常に戻った昼休み、美沙は食事中同僚に声をかけられた。

「渡部さん、仕事は上手くいつてる？」

」

「はい、おかげ様で」

「今日の飲み会、どう？」

」

「はい、喜んで」

……

そして、仕事は終わり、飲み会も解散。

しかし、美沙は忘れ物をして取りに行く。その途中、師長の声がした。

「渡部さんが来てから、精神病患者に陰口叩けなくなっただね……」
「仕方ないですよ。美沙さんはボーダーライン。境界性パーソナリティ障害なんだから、患者さんの気持ちが分からない。なんて言えないですよ」

あ……。聞いて、しまった。そんなこと思ってたんだ。。。

陽が昇るまで、あまり眠れなかった。

病棟のナースステーションでミーティングの記帳の準備をしていると、看護助手の仲間が集まって来た。

「美沙さん、おはよう。……あら、寝不足？」

「樋上さん、おはようございます。ちよっと……」

「あ、いいよ。無理に話さなくても」

「では、ミーティング始めます」

看護助手は、新人時代は患者さんに振り回されてばかりだったけど、仲間が手助けしてくれた。あの日も……。

患者さんに新人はこき使われることがある。タバコのパシリは、代表格。

「渡部さん、フェニティツシモ買って来て」

「はい、今行きまゝす」

「ちよっと！ 入江さん。新人いじりは止めてください！」

美沙は、とつさに駆けつけた看護士さんに驚き、変な声を出した。

「はえ？」

「タバコの購入は制限してるの。知らなかった？」

「はい、すみません……」

「いいの、気にしないで。入院中そういう話無かったんだ」

「はい、薬で気分変わってしまいますから。みんなと距離取ってました」

なのに……

「では、皆さん。今日も頑張りましょう」

その夜、美沙は圭一と食事中、口を開く。

「私、看護士さん信用できない」

突然のことに、圭一も動揺する。

「看護士さんだって人間だよ、色々あるだろ」

「でも……」

「でも、看護師さんだって人間じゃないか」

「ん……」

「味方じゃないから嫌か？」

「そんなこと……」

「迷えばいい。迷って決める。せつかく就いた職だ。簡単に諦めるな」

「うん」

美沙は、はあ、とため息をついて食事を再開する

「大翔葵^{ひろとあおい}、お母さんセンチでちゅね」

美沙はデレデレした圭一を横目で見やる。

「性別分かる前に二人分名前つけたの？」

ふふつと笑う美沙。

「ハハッ平成二十年の新生児命名ランキング一位だ。縁起かつぎ？」

「」

「単純」

まあ、な。と笑う圭一。

でも……でも、と美沙は思う。でもいつも、圭一は私を支えてくれる。

私達はみんなに支えられて生きてる。それはとっても素敵なことで……とっても大事なこと。そしてこれからは……お腹の子もいる。ヤミちゃん、あなたには振り回されてばかりだったけど、おかげで出会いもたくさんあった。つらいことばかりじゃなかったよ。病院送りになったこと、後悔してないわけじゃないけど……とりあえず、私は元気です。

7話 看護助手（後書き）

皆様、最後まで読破してくださり、ありがとうございます！
ダラダラと書いてすみません。今度こそ一段落つきました。

精神病患者が看護助手になれるかどうかはわかりません。美沙を幸せにしたかったです。

また、精神病患者の育児特集を”こころの元気+”というNPO法人発行の本で取り上げた時は書き足します。

それまで、何ヶ月かかるか、あるいは無いかわかりませんが、その時はよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1240f/>

紫陽花

2010年10月12日07時01分発行